

[宮城学院女子大学]

## 建学の泉

長谷部 弘 宮城学院女子大学学長

宮城学院女子大学(通称MGU)の桜ヶ丘キャンパスには、大学礼拝や教職員礼拝が行われる礼拝堂の傍に小さな噴水池がある。1928年に作られて以来、学生たちの憩いの場として親しまれ、宮城学院の象徴とも言われてきた噴水池だ。初夏には新緑の若葉と木漏れ日の下で、秋には周囲の森の紅葉に彩られながら、ベンチに座って昼食を取ったり読書をしたりする学生の姿が見られる。この噴水池の奥には、初代校長であったエリザベス・R・プール先生の凛とした佇まいの写真がはめこまれた石碑が置かれ、「建学の泉」とも呼ばれている。

ところで、現在の桜ヶ丘キャンパスは、1980年に仙台市の中心部東三番丁の旧キャンパスか

ら移転して新たに建設されたものだ。キャンパス内にある赤レンガ壁の校舎群は見事に伝統的な雰囲気を出してくれてはいるものの、小さなミッションスクールとして設立された宮城女学校以来136年間にわたって育まれてきたその歴史と伝統は、キャンパス空間という視点から見ると、1980年を境として、東三番丁キャンパス時代と桜ヶ丘キャンパス時代とに見事に分断されている。

宮城女学校が設立された年である1886年という年は、奇しくも日本の本格的な産業発展の開始年、いわゆる「企業勃興」の始まった年である。創設者たちの想いの中には、この女学校で学ぶ女性たちに、「文明開化」に代わって新たに始まろうとしている発展の時代を生き抜く精神と知恵を身につけて欲しいという願いがあった。

実際、設置時の書類には、創立者達が考えた教育の目的が記されている。それはキリスト教主義の道徳にもとづき、「最良の高等普通教育」を女子に授け、「善良有智の婦人」を育てることであった。「キリスト教主義の道徳」とは、原案では「聖書の教え」と直説法で記されていたとのこと。聖書はイエス・キリストを証言する書物であり、イエスの教えの基本は十戒の趣旨である『神を畏れ、隣人を愛

する』ことであるから、現在の宮城学院のスクールモットーに直結している。さらに、「最良の高等普通教育」という部分は、現代流に翻訳すると高品質のリベラルアーツ教育に相当し、「善良有智の婦人」とは、良識と知的誠実性と知恵を備えた女性のことであるから、現在宮城学院がタグ・ラインとして掲げている「愛のある知性」を身につけた女性ということになるだろう。建学時の女子教育の精神は、現在に至るまで驚くほどしっかりと受け継がれている。

伝統とは、過去の精神を引き継ぎながら、時代状況に対応しつつその姿を新たに变えていくものだ、と言われる。日本は、20世紀半ばの世界大戦と敗戦、そして占領期を経て高度経済成長を経験することにより大きく変わった。その中で、女子大学として中学校高等学校とともに教学体制の基礎を整えた宮城学院は、1980年、キャンパスを郊外の桜ヶ丘へと移転した。最近分かったことだが、その際、実は冒頭に記した旧東三番丁キャンパスの噴水池は移設されなかったのである。そこで、かつての噴水池に強い想いを持つ同窓生たちが資金を集め、移転後3年を経て、現在の場所にかつての姿そのままに復元したのである。それによって新旧キャンパスの空間的断絶は接合さ

れたわけだ。これが、建学の精神とともに宮城学院の伝統を象徴する存在の一つとしてこの「建学の泉」がとり挙げられる所以である。



現在の桜ヶ丘キャンパス 建学の泉

[名古屋学院大学]

## 麦粒苑の噴水「双葉」

小林 甲一 名古屋学院大学現代社会学部教授

本学の瀬戸キャンパスの中央に

切な空間の一つとなっている。

は、地塩館、同朋館、栄光館などの教室棟に囲まれた憩いの場所「麦粒苑」があり、そこに「双葉」と名づけられた噴水が設置されている。広場の名称は「よくよく言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」(日本聖書協会『聖書聖書協会共同訳』ヨハネによる福音書12章24節)に、噴水の名称は「エッセイの株から一つの芽が萌えいで、その根から若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と分別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れる霊。」(『同右』イザヤ書 第11章1・2節)に由来するものであり、キリスト教主義大学である本学にとって大

この噴水「双葉」は、1980年度の父母会卒業記念事

業で寄贈されたものであり、全体的には三本の柱とそれらに支えられたドーナツ状の物体が三段に重ねられた塔のような構造物となっている。また、それぞれには、緑茶色の「織部釉」がかかり、ひと粒の麦が莖や葉に成長する意匠が施された200枚ほどの陶板が貼り付けられており、塔の内部には、これまた織部釉のしつかりとかかった躍動感あふれる深緑色の大きな双葉が配置されている。つまり、噴水それ自体が大きく美しい陶製のオブジェ「デザイン・加藤元男 制作・大津範生」となっており、この双葉とそれを取り囲む造形は、学生による真理の探究と人格の陶冶、人としての成長、そしてそれに寄り添い、見守るものをイメージして、株から若枝が生え、すくすくと伸びるさまを表現したものと考えられる。

瀬戸キャンパスが立地する愛知県瀬戸市は、「日本六古窯」の一つとしてわが国を代表する陶磁器産地であり、そのなかでもさまざまな釉薬を駆使した多彩なやきものづくりのまちとして「日本遺産」にも認定されている。こうした陶磁器産地・瀬戸で、しかもそこを代表する伝統的



な釉葉である織部釉で焼かれた陶製の噴水「双葉」は、瀬戸の地に根ざし、その品野の森のなかに広大なキャンパスを開設して学びの世界を切り拓こうとする想いが込められたものである。以前、瀬戸キャンパスで多くの学生が学んでいたころは、この前で卒業記念のゼミ写真を撮ったり、卒業式のあとには卒業生が水の中に突き落とされたり…。2007年に名古屋キャンパスが新たに開設されたため、麦粒苑と噴水「双葉」のあたりは静かになったが、それだけに一抹の寂しさを感じる。

この寄稿文を執筆するにあたり、改めて噴水「双葉」をじっくり眺めていると、三つの支柱それぞれに分けて、あの有名な聖句が刻まれた楕円の陶板が貼り付けられているのを確認することができた。「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。」（日本聖書協会『口語訳聖書』ヨハネによる福音書4章13・14節）伝統ある建学の精神「敬神愛人」の下、大学の新たな理念として「幽玄啓明」を掲げてキリスト教主義教育にまい進するとともに、そこ

に集う学生の学びと成長を願ってやまなかった当時の人びとの祈りがひしひしと伝わってくる。この噴水の下には、こうしたスクールモットーの泉が湧き上がっているのかもしれない。

「汝の立つところ深く掘れ、そこに必ず泉あり」とはニーチエの名言であるが、私立大学も、ただ見通すことのできない危機に萎縮したり、将来への不安に怯えて爆発したりするのではなく、その建学の精神とこれまで培ってきた大学の理念や特色を見つめ直すことが肝要ではないだろうか。



麦粒苑に立つ噴水「双葉」

[東邦大学]

## 建学の精神が息吹く新たな憩いの場

市原 克己 学校法人東邦大学法人本部施設部長

### 1 東邦大学 習志野キャンパス概要

東邦大学は額田豊・額田晉兄すずむ弟により、女子の理科系教育の向上と健全な人間性の育成を目的に、帝国女子医学専門学校として1925（大正14）年に創設された。現在は医学部、薬学部、理学部、看護学部、健康科学部の5学部と、大学院の医学、薬学、理学、看護学の4研究科を擁する自然科学系総合大学である。そのうち薬学部、理学部、健康科学部及び大学院薬学研究科、理学研究科が置かれている習志野キャンパスは、千葉県船橋市にあった旧日本陸軍騎兵第十三連隊跡の国有地を第二次世界大戦終了後に払い下げを

受けたものである。戦前に建立された石碑類が点在し、歴史を感じさせる自然溢れるキャンパスで、約4000名の学生、約280名の教職員が日々勉学・研究に励んでいる。

### 2 創立100周年記念事業として

キャンパスには国有地払い下げ時から残る中央道路が通っており、両側に各学部の建物が配置されている。ただ、中央道路は正門から入るとやや湾曲して位置しており、見通しが悪かった。また、歩行者と車両とが同じ門を通るため動線が重なり、安全面が懸念される状況であった。そのため、歩行者と車両の動線を分ける歩車分離により、学生・教職員やご来訪者の安全を確保するとともに、より快適なキャンパスライフを実現させるため、本学の創立100周年記念事業の一環として、キャンパスの再整備を行うこととなった。具体的には歩行者専用の正門の新設、外構の整備、キャンパス内にシンボルステージ、イベント広場といった学生の憩いの場の整備、駐輪場・駐車場の整備と多岐にわたった。

### 3 新型コロナウイルス感染症禍で

本事業は、2019（令和元）年度中の工事着工を目指

していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出等の影響を受け、一旦凍結せざるを得ない状況となった。一時は学生の通学もままならない状況であったが、学生の皆さんに再び明るい学生生活を新たなキャンパスで送ってほしいとの教職員の強い思いから、2021（令和3）年4月より本格的に着工し、2022（令和4）年8月に竣工を迎えた。

#### 4 新たな憩いの場の誕生

新たに設置した正門を入ると、創立100周年記念モニュメントと噴水があるシンボルステージが目に入る。モニュメントには学祖・額田晋の著書で建学の精神である「自然・生命・人間」をシンボル化した本学のコミュニケーションマークをイメージした100個の模様が入る。また、噴水の水盤は本学のシンボルカラーのブルーを基調としている。晴れた日にはモニュメントが太陽に照らされて光り輝き、緑豊かなキャンパスに彩りを添えている。噴水は見る人たちの目を楽しませ、心に潤いを与えるとともに、夜間にはライトアップされ、昼間とは異なる幻想的な光景が広がるなど、学生の新たな憩いの場として早くも定着し

ている。さらに、シンボルステージに隣接して新設されたイベント広場には、学生からの要望を受けてキッチンカーによるランチ販売が行われるなど、キャンパスライフを楽しむ新たな取り組みも始まっている。

いまだ新型コロナウイルス感染症は終息していないなか、学生の皆さんが明るい学生生活を送ることができる幸せな日々が一日も早く戻るよう、このキャンパス再整備が何らかの一助となることを願うところである。



創立100周年記念モニュメントと噴水